ヨハネによる福音書 6 章 34～40 節

6 章は「五千人の給食」の出来事から始まり、これを受けるかたちで 群衆とイエスのやり取りが展開されますが、今月はいよいよ その議論の中心に移ります。「命のパン」をめぐるそれです。（なお、あと一つの主題「人の子の肉と血」をめぐるそれについては 次回、59 節までの括(くく)りで取り上げる予定）

「命」の問題は間違いなく 聖書の全体を貫く中心的かつ本質的なテーマの一つで、聖書はそこかしこで これに触れています。考えてみれば、この自分がここにこうして生きているというのは はたして、当たり前で自明なことでしょうか。群衆とイエスのやり取りから、肉の命以上の「いのち」について考えさせられます。そこから、自身が拠(よ)って立(た)つ 真(しん)の拠(よ)りどころを見詰め直せたら、と思わされます。

人々：「主よ、そのパンをいつも わたしたちにください」（34）
イエス：「わたしが命のパンである」（35）

・人々は、イエスに言います。「主よ、そのパンをいつも わたしたちにください」（34）

〔**参照**〕人々のこの言葉は、以前 同じようなことを言った女性のことを想い起こさせないでしょうか。4 章で学んだサマリアの女性で（4：1～42）、ヤコブの井戸の傍(かたわ)らで次のように言いました。

「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください」（15）

イエスが「生きた水」（10）と言われ、「永遠の命に至る水」（14）と言われたのに対して返した言葉ですが、彼女は初め、その意味が分かりませんでした。それで、「〔水をもう〕ここにくみに来なくてもいいように」などと、いかにもピントの外れた応答をしたのでした。

イエスがそのときそこで言われた「渇くことのないいのちの水」とはいったい、どんなものだったでしょうか。それを想い起こしつつ読み進めると、そこから見えてくることがあるように思われます。

・今回の人たちもまた同様で、イエスの言わんとされる真意に思いが至らないようです。「（天からのまことの）パン」（6：32）を食べるとはどういうことなのか。「（神の）パン」（6：33）を食すとはいったい、どういうことなのか。それが分かりません。

・さらには、イエスがこれを知って、「わたしが〔その〕命のパンである」（35）と言葉を足しても、それでも理解できずにいます。

・そればかりか、よく見ると、イエスはすぐにも続けて「わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない」（35）と、さらにも詳しい解説擬(もど)きの言葉まで添えておられます。にもかかわらず、先を読み進めるとどうでしょうか。そこまでしてもらっても、彼らは結局・・・なのです。

・イエスが言わんとされたのは はたして、どんなことだったのでしょう？

他方、人々がそれを理解できずにいるのは いったい、どこに問題があるからなのでしょう？

〔**参考①**〕思えば、前回の箇所で、イエス御自身がこんなふうに言っておられました。「(あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、) パンを食べて満腹したからだ」(6：26)

ということは、群衆の心を占めていたのは・・・・。

〔**参考②**〕加えて、人々がパンを求めたのは、 ― これも前回の箇所になりますが ― 「天からのパン」で先祖が養われた歴史があるからだ、と言うのです。「わたしたちの先祖は、荒れ野でマンナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです」(6：31) と、彼らは言っています。

当時、来たるべき救い主は旧約時代のマンナを再びもたらしてくれる、と 人々は考えていました。そんな彼らに対し、イエスは、この私が神に遣わされた者である、と そう言われた (6：29)。そこで、「ならば・・・」と、これに対して 人々が返したのが続く 30 節以下の言葉でした。

とすると、そこにはどこか、皮肉な思いも込められていたのではないでしょうか。そんな思いを推しはかりつつ 彼らの一連の言葉を読み解くと、はたして どんなふうになるでしょうか。人々の擦(す)れ違(ちが)い理解の一助になるかもしれません。

そして 結局、イエスはどうなさったのか。彼らの求めに応じられたのか、それとも 応じられなかったのか。また、その理由は？

――付記（前回からの転載）――

・「マンナ」(6：31) とは、エジプトを脱出したイスラエルの民が荒れ野を放浪した 40 年の間、天から与えられた食べ物でした。旧約聖書では「マナ」(出エジプト 16：31 他) と呼ばれています。

・「朝・・・露(つゆ)が蒸発すると、・・・荒れ野の地表を覆って 薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた」(同 16：13～14) と述べられているもので、それは「蜜の入ったウェファースのような味がした」(同 16：31) と記されています。

・イスラエルの人々はこれを「天からのパン」(同 16：4) と呼んでいました。

・そして、次に救い主が来られるときには そのパンをもう一度 与えてくださる、との信仰が受け継がれてもいました。ですから、群衆はそれを要求したのでした。

「命のパン」のリアリティー
― ヨハネ福音書の時代を生きた信仰者の現実から見ると ―

・しかし、それにしても・・・と感じられる方もおられるかもしれません。ヨハネによる福音書はどこか抽象的・観念的で、日常的な実感としては感じにくい、というようにです。

・同様な意味で、「わたしが命のパンである」(35) との言葉もいまひとつ ピンとこなくて・・・と。

・ですが、ぜひとも忘れていただきたくない事実があります。それは、ヨハネの福音書が普通の人々の、しかもその日ごとの生活の中で著わされた書だということです。

・一つには、そもそも 福音書編纂(へんさん)の先駆けとされるヨハネからして、ガリラヤの漁師の出でした。

いわゆる学者とはほど遠い人物です。

・加えて、ヨハネの福音書がまとめられたのは紀元 90 年代で、エルサレムから小アジア（現在のトルコ主要地域）に及ぶ一帯のどこかで完成したものとみられますが、それは 国の内外から迫害を受けるなかでのことでした。

①キリスト教はいまだ、なんとも妙な新興宗教です。ユダヤを治めていた 時のローマ帝国からすれば、公認のユダヤ教でも警戒の対象なのですから、得体の知れないそれにはなおのこと、監視の目が向けられていました。

②他方、先祖代々の伝統的なユダヤ教を捨て、キリストの群れに加わるわけですから、国内的にもユダヤ教から迫害の手が伸びます。迫害はとりわけ、ローマとの戦いでエルサレムの神殿が炎上し、エルサレムが陥落した紀元 70 年を機に、その激しさがいっそう増していました。神殿礼拝の場を失ったユダヤ教が、律法の教育とその遵守（じゅんしゅ）の徹底によって祖国の一致を図ろうと、内側からの体制強化と異分子の排除とを強めたからです。

・こうしたなか、教会に連なる者たちにとって、イエスに従うということははたして どんな日々を意味したでしょうか。

・そして、その彼らがイエスの福音書をまとめ、そこに「わたしが命のパンである」(35) とのイエスの言葉を書（か）き留（と）めたということは・・・。

・背後にある彼らのそうした現実に想いを馳（は）せつつ その福音書を読むとき、「命のパン」のリアリティーについて、なにがしかの示唆が与えられはしないでしょうか。

「しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見ているのに、信じない」(36)

・イエスを目（ま）の当（あ）たりにしていない私たちですから、言いようによっては たしかに、リアリティーに欠けるのも無理からぬところかもしれません。

・「しかし」と、イエスはここでもまた 言われます。「しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見ているのに、信じない」

・事実、彼らはイエスの傍（かたわ）らで生き、イエスを目の当たりにしていました。にもかかわらず、イエスを信じないどころか、最後はなんと 十字架にまで追いやったのでした。

・ということは つまりは、何がそこで問われているのでしょうか。イエスは、だから 何が問題なんだ、と言われるのでしょうか。

・こうして、イエスを追って会堂に押しかけた群衆たちは、事が信仰の核心に至るや、そこで態度を違（たが）え、異なる人々に分かれてゆきました。イエスの真意を理解し これを受け入れた者たちと、それを理解せず イエスのもとを離れ去った者たちとに、です。

教会の葛藤？ 格闘？

・つまり、そこにあるのは、（パンと魚（さかな）の あの「五千人の給食」で）誰もが同じ言葉を聞き、同じしるしを見、同じ御業（みわざ）にあずかっているのに、その同じ人たちが道を違（たが）え、イエスに赴く者とイエ

スから離れる者とに分かれてゆく、という現実です。

・これは、ヨハネの福音書がその全体を通して格闘するとともに、それを読む者たちにも提起している重要な問題と言えるように思われます。私たちははたして、これをどう考えたらよいのでしょうか。

・それは さらには、追って 52 節以下で言及される 人の子の肉と血をめぐるやり取りとも関連し、ヨハネの教会が生きた その情況をも推察させるものと言えるでしょう。

・それにしても、それらは初めから そのように定められていたのだろうか、と そんな疑問を憶(おぼ)えさせられなくもないのではないでしょうか。

・というのも、例えば 37 節に「父がわたしにお与えになる人は皆・・・」とあり、また 39 節にも「わたしに与えてくださった人を一人も・・・」というようにあるからです。どちらも 読みようによっては、父なる神がイエスにお与えになる人々とそうされない人々とがいる、というふうにとれなくもありません。もしそうであれば、救われる人と救われない人とが初めから定められているということに・・・。これもまた はたして、どう理解したらよいのでしょうか。

・ということで、ヨハネの教会が葛藤し、格闘したとも考えられるこれらの問題。これらについては、次回（6：34～59 を予定）少しく触れさせていただければと思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

いのちのパンとは？
それを食べるとは？
そこで生かされるとは？
そのようにして歩みを重ねた人たちの例は？
そのような信仰者の証(あか)しを聞いたことは？

これらに心を配りつつ、いま一度、聖書の本文に目を通してみてはいかがでしょうか。